

平成22年5月6日現在

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2007～2009  
課題番号：19592496  
研究課題名（和文）パートナーの産前・産後1年間における男性の精神状態に関する研究  
研究課題名（英文）Mens' mental state during the pregnancy of their wives and after one year following childbirth.  
研究代表者  
山川 裕子（YAMAKAWA YUKO）  
佐賀大学・医学部・准教授  
研究者番号：00259673

## 研究成果の概要（和文）：

本研究の第1課題は、子どもが誕生後1年間5時点の父親の精神状態を郵送調査し、関連要因を検討した。297名のエジンバラ産後うつ病尺度の平均点は、4.2～4.8点の範囲で、高得点者は8.4%～14.7%の範囲であった。EPDS得点と関連したのは、妻が妊娠期の精神状態、仕事ストレス、夫から見た妻の精神状態であった。第2課題は、妻の妊娠中に起こった夫の精神的揺らぎについて、25名にインタビューした。13個の概念が抽出され、その多くは妻との関係を表した。

## 研究成果の概要（英文）Outline of Study Results：

The first task of this study involved the investigation of related factors of the mental state of fathers at 5 different times during one year span after the birth of their child by conducting a mail survey. The average score for the 297 men on the Edinburgh Postnatal Depression Scale (EPDS) was in the range of 4.2 to 4.8, and the range for the high-scorers was 8.4% to 14.7%. Husbands' mental state during the period of pregnancy, work stress, and the mental state of the wives were related with EPDS score.

The second task involved the research of the occurrence of psychological wavering among husbands during their wives pregnancies by conducting interviews with 25 male participants. Thirteen concepts were extracted and many of them showed a relationship to their wives.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域看護学

キーワード：父親，精神状態，産後1年，EPDS，育児，家事，仕事，ストレス，夫婦関係

## 1. 研究開始当初の背景

近年、うつ病は世界的に増加し、産後うつ病も増加している。母親の精神状態が子どもの発達に及ぼす影響は非常に大きく、産後うつ病に関する研究は多い。我が国において、母子医療・保健分野における調査は、子どもと母親が中心であり、父親はサポートとしての位置づけで研究されていることが多い<sup>1)</sup>。父親自身に対する親性の獲得<sup>2)</sup>を含めた育児支援は、母親とは比較にならない程少ないのが現状である。

最近、パートナーの妊娠中から産後の期間に、父親もうつ状態になるということが海外先進国で認識され始めている<sup>3)</sup>。先行研究<sup>4)</sup>では、産後にうつ状態を呈す母親の出現率26.3%に対し、父親のそれは11.9%であり、産後の父親のうつ状態を paternal postpartum depression (PPD) として報告している。また、父親のうつ状態と子供の発達の関係について、負の影響は男児の行動面のみ及ぶという結果が注目されている<sup>5)</sup>。うつ状態になると、意欲低下に加えて身体症状が現れ、仕事や家事などの役割を果たすことが困難になると思われる。

現在わが国の経済状況は、1990年代後半に起きた経済金融危機に始まり、景気の低迷が続いている。雇用情勢は、長期(終身)雇用慣行の見直しが進み、雇用不安など先行き不透明な状態である。そういった厳しい労働環境において、父親には産前・産後の妻に対する理解と協力が求められている。

赤ちゃんの健全な育成のためには、母親への支援はもちろん、父親に対する支援も必要だと考える。そのためには、男性の心身の健康状態や重要な役割である「仕事」を含め、子育てに対する男性の思い等を理解し、必要なサポートについて検討する必要がある。

## 2. 研究の目的

- (1) 子どもが誕生後1年間における男性の精神状態と影響要因を明らかにする。
- (2) 妻の妊娠期間における男性の“精神的な揺らぎ”について詳細に記述する。

## 3. 研究の方法

### (1) 課題1

2007年8月～2008年10月に、A県内の産科クリニックで出産した母親の同意を得て夫(子どもの父親)に、子どもが誕生後1年間の5時点〔新生児期(以下0M)、生後1ヵ月時(以下1M)、生後3ヵ月時(以下3M)、生後6ヵ月時(以下6M)、生後1年時(以下1Y)]を継続的に郵送調査した。

調査項目は、職業的項目を含む基本的属性と精神状態の測定には日本版エジンバラ産後うつ病尺度(EPDS)<sup>6)</sup>を用いた。EPDSは、Coxが1987年に開発<sup>7)</sup>し、産後うつ病のスクリーニングに有効であることが確認されているもので、広く一般的に使用されている。10項目4件法で日本人の場合、9点以上うつ病が疑われる。産後の母親に対する調査票であるが、質問内容は母親に特化したものでなく、十分男性にも使用可能である。英国の母子の健康に関する大規模縦断研究<sup>8)</sup>(the Avon Longitudinal Study of Parents and Children:ALSPAC)において、父母共に使用されていることを踏まえて選択した。

### (2) 課題2

上記期間内に、A県内2つの産科クリニックで出産した女性の夫を対象として、妻を介して調査用紙を渡すか郵送した。妻の妊娠中に起こった精神的揺らぎの有無・程度・時期を問い、揺らぎがあったと回答した男性に、対面か電話で半構成的面接を行った。修正版グラウンデッドセオリーアプローチ法を用い分析した。

### (3) 倫理的配慮

課題 1 は口頭、課題 2 は口頭及び文書で、調査時点の度に研究の趣旨と方法及び参加の任意性と同意の撤回の自由、個人情報保護等について説明し、同意書を得て実施した。調査の実施にあたって、佐賀大学医学部倫理委員会の承認を得た。

## 4. 研究成果

### (1) 研究課題 1 : 子どもが誕生後 1 年間における男性の精神状態及び影響要因

#### ① 対象者の基本的属性

分析対象者数は、297 名(回収率 45.8%)、5 時点の回答数は、0M : 223 名、1M : 238 名、3M : 197 名、6M : 176 名、1Y : 167 名で、生後 1 ヶ月からの参加者がいた。平均年齢 33.2 ± 5.5(範囲 21~52)歳、今回の子どもが第 1 子の方は 152 名(51.4%)で、正常な出産経過で誕生した子どもが大部分であった。核家族が多数(92.5%)を占めた。

#### ② 職業的属性

有職者は 289 人(97.6%)で、うち 86.9%が会社員などで、昼中心の勤務が 87.5%であった。収入は 300~500 万円未満が 48.2%と最も多かった。仕事の要求水準は「高い」37.6%、「低い」9.4%、仕事の負荷は「大きい」47.6%、「少ない」4.1%で、仕事の満足度は「あまり満足していない」「全く不満足」の合計 29.8%であった。87.9%が労働時間の延長を有し、仕事の融通性が「あまりできない」「全くできない」合計 36.5%で、休暇の取りやすさは「あまり取れない」「全く取れない」合計 44.1%であった。育児休業制度が有る人は 32.4%で、「わからない」が 24.1%いた。育児参加への職場の理解は「あまりない」「全くない」合計 44.0%であった。

#### ③ ストレスと内容

5 時点毎にストレスが有ると答えた人は、

67.7%~72.5%の範囲で推移し、うち仕事のストレスは全時点で 90%前後見られ、最も多かった。一方、家事のストレスは 6.1~11.0%、育児ストレスは僅か(1.3~6.3%)だった。

#### ④ 精神状態

5 時点の EPDS 平均点と範囲及び高得点者の割合を表 1 に示した。EPDS 得点と年齢や今回が第 1 子か否かなどの属性で、差はなかった。筆者が実施した先行研究<sup>9) 10)</sup>の出産後の母親と比較した結果、今回の男性の方が高い EPDS 得点を示した。全ての時期の EPDS 得点は、相互に強い相関が見られた(spearman 相関係数 0.575~0.726,  $p < 0.001$ )。また、妊娠中に精神状態が悪かった者は 66 名(22.5%)で、5 時点全ての EPDS 得点と弱い相関が見られた(spearman 相関係数 0.161~0.269,  $p < 0.05 \sim 0.001$ )。

つまり、産後の母親よりも父親の方が 1 年間持続的に、さらに妊娠期より引き続いて精神状態が悪い傾向が明らかになった。

表 1 EPDS 得点と高得点者出現率

	平均点 ± SD (範囲)	高得点者数 (%)
0M	4.61 ± 2.92 (0~16)	22 (9.9)
1M	4.53 ± 2.89 (0~20)	20 (8.4)
3M	4.16 ± 2.85 (0~14)	19 (9.7)
6M	4.76 ± 3.79 (0~23)	26 (14.7)
1Y	4.25 ± 2.73 (0~13)	14 (8.4)

#### ⑤ 精神状態の関連要因

5 時点毎の EPDS 得点に全て関連が見られたのは、その時期の「健康状態」「睡眠状態」「ストレス状態」「夫から見た妻の精神状態」の 4 項目であった(spearman,  $p < 0.05 \sim 0.01$ )。

まず、ストレスとの関連を説明する。

EPDS 得点とストレスは、全ての時期で有意に相関し(表 2)、ストレス有無群別の EPDS 得点を比較した結果(表 3)、全ての時期でストレスが有る群の方が有意に精神状態が悪かった。また、EPDS 高低得点群別に、調査時点

での仕事ストレスを有する人の割合を比較したところ、有意な差は見られなかったが、全時期で高得点群の方が仕事のストレスが有る人の割合が高かった。

前述したようにストレスの内訳として、大部分が「仕事のストレス」を示していることから鑑み、ストレス(特に仕事のストレス)と健康及び睡眠の良否は、EPDS 得点と関連すると考えられる。子どもが誕生後の男性の精神状態を検討するために EPDS は有用であることが示唆された。

表 2 EPDS 得点とストレスの程度の相関

		ストレス
EPDS 得点	0M	0.339 **
	1M	0.354 ***
	3M	0.463 ***
	6M	0.481 ***
	1Y	0.277 ***

spearman 相関係数 \*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

表 3 ストレス有無別の EPDS 得点の比較  
平均点(SD)

	有群	無群	有意差
EPDS 得点	0M	5.28(2.96)	3.06(2.15) ***
	1M	5.08(2.79)	3.55(2.79) ***
	3M	4.87(2.84)	2.61(2.22) ***
	6M	5.54(2.13)	2.49(2.13) ***
	1Y	4.58(2.82)	3.39(2.23) *

Mann-WhitneyU 検定 \*\*\*p<0.001, \*p<0.05

次に、妻の精神状態との関連を説明する。

調査毎に「夫から見た妻の精神状態」を「非常に不安定」「少し不安定」「安定している」の3段階で聞いた結果を表4に示す。「非常に不安定」と「少し不安定」を合わせて、妻が精神的に不安定と感じている男性は、全ての時期で40%前後存在した。

調査時点毎の「夫から見た妻の精神状態」について、同時期の男性の EPDS 得点との関

連を見た結果、どの時期も弱い相関が見られた(表5)。また、「非常に不安定」と「少し不安定」を合わせて【不安定群】とし、【安定群】の2群別に EPDS 得点を比較したところ(表6)、全ての時期で妻の精神状態が不安定と感じる男性の群の方が、有意に EPDS 得点が高く精神状態が悪かったことから、夫と妻の精神状態は何らかの関係があり、相互に影響し合っている可能性が示唆された。

表 4 夫から見た妻の精神状態 人数(%)

	非常に不安定	少し不安定	安定
0M	8(3.7)	78(36.3)	129(60.0)
1M	11(4.8)	93(41.0)	123(54.2)
3M	9(4.7)	69(36.1)	113(59.2)
6M	8(4.6)	60(34.9)	104(60.5)
1Y	4(2.4)	64(39.0)	96(58.6)

表 5 EPDS 得点と母親の精神状態との相関

		同時期の夫から見た妻の精神状態
EPDS 得点	0M	0.231 ***
	1M	0.141 *
	3M	0.248 **
	6M	0.287 **
	1Y	0.181 *

spearman 相関係数 \*\*\*p<0.001, \*\*p<0.01, \*p<0.05

表 6 妻の精神状態安定・不安定群別 EPDS 得点比較  
平均点(SD)

	不安定群	安定群	有意差
EPDS 得点	0M	5.48(3.08)	4.13(2.71) **
	1M	4.89(2.77)	4.20(3.01) *
	3M	4.95(3.03)	3.53(2.50) *
	6M	6.10(4.60)	3.78(2.70) ***
	1Y	5.01(3.04)	3.78(2.36) *

Mann-WhitneyU 検定 \*\*\* p<0.001, \*p<0.05

以上のことからまとめると、子どもが誕生後1年間の男性の精神状態には、子どもが誕生前から続く社会的役割のストレスと妻の

精神状態が影響していることが明らかになった。妻の精神状態については、男性の主観的な捉え方に基づいた結果であるため、精神状態が悪い者程、妻の精神状態を敏感に察知し否定的評価をしている可能性も拭えない。男性のみの本調査の限界であり、今後は夫婦の精神状態を対応させたデータを用いた分析や、男性の精神状態と相関がある要因を投入した重回帰分析を行うなど、分析手法の検討が課題である。

## (2) 研究課題2：妻の妊娠期間における男性の“精神的な揺らぎ”について

全回答者 503 名中、本調査の該当者は 122 名(出現率 24.3%)。面接は 25 名、平均時間 16(範囲 6~55)分、平均年齢 33.2±5.1(範囲 25~46)歳、第 1 子 15 名(60.0%)、精神的揺らぎの程度は、[非常に揺らいだ]が 1 名のみ、他は「少し揺らいだ」であった。精神的揺らぎの時期は、妊娠判明~4 カ月迄 4 名(13.8%)、妊娠 5~8 カ月迄 17 名(58.6%)、以後出産迄 8 名(27.6%)であった(複数回答)。

分析テーマ『妻が妊娠中に男性の精神状態が不安定になった原因』の抽出概念は 13 個で、うちカテゴリーは 4 個作成された。以下、概念を [ ]、カテゴリー【 】を用いて説明する。

妊娠中の [妻の不安定さ] により [妻からの八つ当たり] されることで、【妻から振り回され(る)】男性は精神的に揺らいでいた。[妊娠・出産に対する懸念] を示す反面、妊娠中の妻の状態を実感できず、妻の状態が [わからない] ことから、【妻(胎児)への過剰な気遣い】が生じていた。夫・父親としての責任感と悪阻のため体調の悪い妻の代わりに、必然的に【生活の調整・代行】を行う。しかしながら、役割を果たす努力は [役割(家

事)遂行の空回り] 状態となる。家事ができない妻や苛々している妻を前に、頭ではわかっていても [くつろげない家庭] に閉口し、[妊娠に伴う(自分の)ライフスタイルの変化] に気持ちがついていかない。妻に気遣い家事を引き受けるものの、男性にとっては [過重課題・キャパシティの超過] が起こり、負担となっていた。同時期に、家庭内に引越等の出来事や仕事の変化が起こった人も多く、男性に多くの課題がかかっていたことも一因となっていた。また、妊娠前からの膠着した夫婦関係が、妊娠を期に [妻とのスタンスの相違] として彷彿していた。さらに、根底に男性の [根強いジェンダービリーフ] が存在し、【相互補完性不十分な夫婦関係】を呈していた。

結論として、妻の妊娠期に精神的揺らぎがあった男性の体験を質的に分析した結果、『妊娠期の妻を持つ夫の生活調整プロセス—役割課題を抱え込む夫—』像が描け、妊娠期の妻を支援する男性の心理状態の特徴が明らかになった。男性が精神的に揺らいだ原因の多くは、妻との関係を示す概念で、妊娠前からの夫婦関係が、妊娠期に顕在化したことが推測された。今後は、育児適応期にある父母の精神状態について、家族単位で検討する必要がある。

## 【引用文献】

- (1) 宮本政子他, 乳幼児を養育する父親と母親の育児ストレスと関連要因, 香川大学看護学雑誌, vol. 10 No. 1, p13-23, 2006.
- (2) 柏木恵子, 父親の発達心理学, 川島書店, 1993.
- (3) Paulson JF, et al., Individual and combined effects of postpartum depression in mothers and fathers on parenting behavior. Pediatrics, vol. 118 No. 2, p659-68, 2006.
- (4) Pinheiro RT, et al., Is paternal postpartum depression associated with maternal postpartum depression? Population-based study in Brazil, Acta

- Psychiatr Scand, vol. 113 No. 3, p230-2, 2006.
- (5) Ramchandani P, et. al., Paternal depression in the postnatal period and child development: a prospective population study. Lancet, vol. 365 No. 9478, p2201-5, 2005.
  - (6) 岡野禎治他, 日本版エジンバラ産後うつ病自己評価票 (EPDS) の信頼性と妥当性. 季刊精神科診断学, 7 (4), 525-533, 1996.
  - (7) Cox JL., Holden JM: Sagovsky R: Detection of postnatal depression. Development of the 10-item Edinburgh Postnatal Depression Scale. Brit J Psychiat, 150: 782-786. 1987.
  - (8) Kirby D-D, et. al., Family Structure and Depressive Symptoms in Men Preceding and Following the Birth of a Child. Am J Psychiatry, Vol. 155 No. 6, p818-823, 1998.
  - (9) 福澤雪子・山川裕子, 産後1年間の母親の生活ストレスと精神状態の関連. 日本母性衛生学会学術集会抄録集 Vol. 48 No. 3, p188, 2007.
  - (10) 福澤雪子, 初産の母親の育児におけるストレス対処と対児愛着感情の形成に関する基礎的調査, 平成17~19年度科学研究費補助金 基盤研究C研究成果報告書, p1-99, 2008.

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計5件)

- (1) 松井麻衣・小柳さおり・松尾田鶴子・山川裕子, うつ病患者に対する服薬自己管理プログラムの評価, 第39回日本看護学会精神看護論文集, 査読有り, No39, p137-139, 2009.
- (2) 永江里美他11名(10・11番目), 当院におけるベビーマッサージの現状と必要性について, 福岡母性衛生学会雑誌, 査読無し, No19, p16, 2009.
- (3) 山川裕子・福澤雪子, 生後3ヵ月以内の子どもを持つ父親の精神状態, 日本看護研究学会雑誌, 査読有り, 31巻3号, p9, 2008.
- (4) 鄭香苗他13名(12・13番目), 当院におけるカンガルーケアの現状と今後の課題, 福岡母性衛生学会雑誌, 査読無し, No18, p9, 2008.
- (5) 堀井二三代他13名(12・13番目), 産後の母親に対する継続ケアの取り組みに関する報告II, 福岡母性衛生学会雑誌, 査読無し, No17, p14, 2007.

[学会発表] (計8件)

- (1) 山川裕子・福澤雪子・篠崎克子, 妻が妊娠期における夫の精神的揺らぎ, 第50回

日本母性衛生学会, 示説, 2009年9月28日, 横浜市.

- (2) 山川裕子・福澤雪子, 子どもが誕生後1ヵ月の父母の精神状態, 示説, 2009年10月21日, 奈良市.
- (3) 野口あけみ他11名(9・10番目), 当院におけるおっぱいホットライン利用の現状調査報告, 第19回福岡母性衛生学会, 口演, 2009年7月5日, 福岡市.
- (4) 山川裕子・福澤雪子・楠葉洋子, 産後1年間における母親の精神状態の経時的変化, 第28回日本看護科学学会, 示説, 2008年12月14日, 福岡市.
- (5) 福澤雪子・山川裕子・楠葉洋子・長田順子, 産後1年間における母親のストレス対処能力の傾向, 第28回日本看護科学学会, 示説, 2008年12月14日, 福岡市.
- (6) Yuko Yamakawa, Yukiko Fukuzawa, Kouichi Shinchi, Mariko Nakamura, Maternal mental state and life stress of Japanese women during the six months after childbirth, ICN International Conference, Poster, 2007年5月31日, Japan, Yokohama.
- (7) 福澤雪子・山川裕子, 産後1ヵ月の母親の精神状態とその関連要因-初産婦と経産婦の比較-第33回日本看護研究学会, 示説, 2007年7月28日, 盛岡市.
- (8) 福澤雪子・山川裕子, 産後1年間の母親の生活ストレスと精神状態の関連, 第8回日本母性衛生学会, 示説, 2007年10月11日, つくば市.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山川 裕子 (YAMAKAWA YUKO)  
佐賀大学・医学部・准教授  
研究者番号: 00259673

##### (2) 研究分担者

福澤 雪子 (FUKUZAWA YUKIKO)  
産業医科大学・産業保健学部・講師  
研究者番号: 30352321  
篠崎 克子 (SHINIZAKI KATSUKO)  
佐賀大学・医学部・講師  
研究者番号: 30331010

##### (3) 研究協力者

内川 加代子  
医療法人SWC真田産婦人科麻酔科クリニック・助産師  
平川 俊夫  
医療法人SWC真田産婦人科麻酔科クリニック・理事長  
平川 万紀子  
医療法人SWC真田産婦人科麻酔科クリニック・院長